

2017年12月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

執着と苦

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫／実践の方法（道）に関する経典群／諦相応／6蘊、7処

(2) 主題

釈迦牟尼世尊は、一貫して、執着によって苦が生じ、執着がなくなれば苦がなくなると説いています。このことについて、学んでみたいと思います。

2. 経文

(1) 二つの経文

二つの経文に説かれる教えを見てみたいと思います。増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫の、実践の方法（道）に関する経典群、諦相応のなかの「蘊」「処」と題する経文です。（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、「蘊」p.290~292、「処」p.292~294）

この二つは、ほぼ同じ文章で、四つの聖諦を説いています。異なるところは「苦についての聖諦」だけです。

(2) 経文（導入部分＝「蘊」「処」共通）

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、バーラーナシー（波羅捺）のイシパタナ・ミガダーヤ（仙人住处・鹿野苑）にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、四つの聖諦がある。その四つとは何々であろうか。それは、苦についての聖諦、苦の生起についての聖諦、苦の滅尽についての聖諦、および、苦の滅尽にいたる道についての聖諦である」

(3) 経文（苦についての聖諦＝「蘊」と「処」で異なる）

① 蘊

「比丘たちよ、では、苦についての聖諦とは何であろうか。それは、五つの人間の生活を構成する要素である、ということが出来る。いわく、色（肉体）なる要素、受（感覚）なる要素、想（表象）なる要素、行（意志）なる要素、および、識（意識）なる要素である。比丘たちよ、これを名づけて苦についての聖諦となすのである」

② 処

「では、比丘たちよ、苦についての聖諦とはどういうことであろうか。それは、人間の内なる六つの感官の領域であるということが出来る。では、その六つとはなんであるか。眼の領域・耳の領域・鼻の領域・舌の領域・身の領域・意の領域である。比丘たちよ、これを名づけて苦についての聖諦というのである」

(4) 経文(苦の生起についての聖諦＝「蘊」「処」共通)

「比丘たちよ、では、苦の生起についての聖諦とは何であろうか。それは、迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りとを伴い、あれへこれへと絡まりつく渴愛である。すなわち、欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛がそれである。比丘たちよ、これを名づけて苦の生起についての聖諦となすのである」

(5) 経文(苦の滅尽についての聖諦＝「蘊」「処」共通)

「比丘たちよ、では、苦の滅尽についての聖諦とは何であろうか。それは、その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨て去り、振り切り、解脱して、執著なきにいたるのである。比丘たちよ、これを名づけて苦の滅尽についての聖諦となすのである」

(6) 経文(苦の滅尽にいたる道についての聖諦＝「蘊」「処」共通)

では、比丘たちよ、また、苦の滅尽にいたる道についての聖諦とは何であろうか。それは、聖なる八支の道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。比丘たちよ、これを称して苦の滅尽にいたる道についての聖諦というのである。

(7) 経文(結び＝「蘊」「処」共通)

比丘たちよ、これが四つの聖諦である。だからして、比丘たちよ、〈こは苦なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよいのである」

3. 四つの聖諦

(1) 苦についての聖諦

経文は、「苦についての聖諦とは何であろうか」と問い、「五つの人間の生活を構成する要素であるということが出来る」と答えています。また「人間の内なる六つの感官の領域であるということが出来る」と答えています。

「五つの人間の生活を構成する要素」や「人間の内なる六つの感官の領域」が苦なのではありませんが、これらの要素・領域に苦が生起するのです。このほかの要素・領域に苦が生起することはありません。要するに、自分自身の心身に苦が生起するのです。このことをはっきりと知って自覚することが「苦についての聖諦」です。

(2) 苦の生起についての聖諦

「苦の生起についての聖諦」は、「迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りとを伴い、あれへこれへと絡まりつく渴愛である」とあります。

「五つの人間の生活を構成する要素」や「人間の内な六つの感官の領域」に苦が生起するのは、これらの要素・領域が味わう快さに執着するからです。執着が増大して渴愛になります。

自分の持つ執着・渴愛によって苦が生起することをはっきりと知って自覚することが、苦の生起についての聖諦です。

(3) 苦の滅尽についての聖諦

「苦の滅尽についての聖諦」は、「その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨て去り、振り切り、解脱して、執着なきにいたるのである」とあります。

自分の中にある渴愛を滅することによって、自分の苦が滅尽することをはっきりと知って自覚することが、苦の滅尽についての聖諦です。

(4) 苦の滅尽にいたる道についての聖諦

「苦の滅尽にいたる道についての聖諦」は、「聖なる八支の道である」とあります

聖なる八支の道を実践すれば渴愛が滅尽し、それによって苦が滅尽することをはっきりと知って自覚することが、苦の滅尽にいたる道についての聖諦です。

(5) 四つの聖諦の骨格

四つの聖諦は、次のことを述べていると見ることができます。

渴愛（執着）がある → 苦が生起する

渴愛（執着）が滅する → 苦が滅する

4. スッタニパータから

(1) スッタニパータ

① もっとも古い仏教聖典

中村 元博士は、訳書『ブッダのことば(スッタニパータ)』（岩波文庫）の解説で、スッタニパータの位置づけについて、次のように述べています。

「いまここに訳出した『ブッダのことば(スッタニパータ)』は、現代の学問研究の示すところによると、仏教の多数の諸聖典のうちでも、最も古いものであり、歴史的人物としてのゴータマ・ブッダ(釈尊)のことばに最も近い詩句を集成した一つの聖典である。シナ・日本の仏教にはほとんど知られなかったが、学問的には究めて重要である。これによって、われわれはゴータマ・ブッダその人あるいは最初期の仏教に近づきうる一つの通路をもつからである」(中村

元訳「ブッダのことば(スッタニパータ)」岩波文庫、p433~434)

② 簡素な仏教

また、中村 元博士は、スッタニパータに説かれる教えについて次のように解説しています。「この『ブッダのことば(スッタニパータ)』の中では、発展する以前の簡単素朴な、最初期の仏教が示されている。そこには後代のような煩瑣(はんさ)な教理は少しも述べられていない。ブッダ(釈尊)はこのような単純ですなおな形で、人として歩むべき道を説いたのである。かれには、みずから特殊な宗教の開祖となるという意識はなかった。修行者たちも樹下石上(じゅげせきじょう)に坐し、洞窟に瞑想(めいそう)する簡素な生活を楽しんでいたので、大規模な僧院(精舎(しょうじゃ))の生活はまだ始まっていなかった」(中村 元訳「ブッダのことば(スッタニパータ)」岩波文庫、p. 438~439)

③ 「学生メッタゲーの質問」より

スッタニパータは、五つの章からなっていますが、その中でも、第四章、第五章がもっとも古いとされています。ここでは、第五章にある「学生(がくしょう)メッタゲーの質問」から、今回の主題に関係のある部分を学んでみたいと思います。経文の要点のみを示します。

(2) 苦の生起

メッタゲーさんがたずねた。

「世の中にある種々様々な、これらの苦しみは、そもそもどこから現われ出たのですか」

師(ブッダ)は答えた、

「世の中にある種々様々な苦しみは、執着を縁として生起する。

実に知ることなくして執着をつくる人は愚鈍であり、くり返し苦しみに近づく。

だから、知ることあり、苦しみの生起のもとを覩じた人は、再生の素因(執着)をつくってはならない」

(3) 苦を捨てる

(メッタゲーのことば)「わたくしはその最上の理法を受けて歓喜します。その理法を知って、よく気を付けて行い、世間の執着を乗り越えるでしょう」

師が答えた、

「メッタゲーよ。(中略)このようにして、よく気をつけ、おこたることなく行なう修行者は、わがものとみなして固執(こしゅう)したものを捨て、生や老衰や憂(うれ)いや悲しみをも捨てて、この世で智者となって、苦しみを捨てるであろう」

(3) 釈迦牟尼世尊の回答の要旨

ここで釈迦牟尼世尊は、次のことを述べています。

執着がある → 苦しみが生起する

執着を捨てる → 苦しみを捨てる

5. 妙法蓮華經方便品から

(1) 経文

妙法蓮華經方便品の冒頭に、次の経文があります。

「舎利弗よ。わたしが仏の悟りをえてからこのかた、いろいろと過去の実例をあげたり、譬えを引いたりして、おおくの人びとに教えを説きひろめました。すなわち、それぞれの人と場合に合った適当な方法で、人びとを導き、自己中心の考え方からこの世のさまざまなものごとに執着し、その執着のために苦しんでいることを悟らせ、それからはなれさせることによって苦しみを解いてあげました。なぜそれができたかといいますと、わたしは方便と智慧の両方を完成し、身に具えているからです」(庭野日敬著『新釈法華三部経2』佼成出版社、p. 198-199)

(2) 執着と苦の関係

この経文に、次のことが述べられています。

人びとは、執着によって苦しむ

釈迦牟尼世尊は、人びとを執着から離れさせ、苦から救ってきた

6. 妙法蓮華經譬喻品から

(1) 経文

妙法蓮華經譬喻品に、次の経文があります。

「すべての苦の原因は何であるかといえば、貪欲こそじつにその根本であります。もし貪欲を滅しさえすれば、苦の依りどころがなくなるわけですから、ひとりでに消滅してしまうのです」

(庭野日敬著『新釈法華三部経3』佼成出版社、p. 228)

(2) 苦の根本原因

ここに、貪欲と苦の関係が述べられています。

貪欲が苦の根本原因である

貪欲を滅しさえすれば、苦はひとりでに消滅してしまう

7. 執着と苦

今回学びました「阿含経」、「スッタニパータ」、「妙法蓮華経」には、次のことが説かれていると見ることができます。

執着があれば苦がある 執着が生じれば苦が生じる

執着がなければ苦がない 執着が滅すれば苦が滅する